山吹色のメロン

～雪の中で育つたからもの～

ぶん・三谷 乃亜　え・ねこのうみ ちひろ

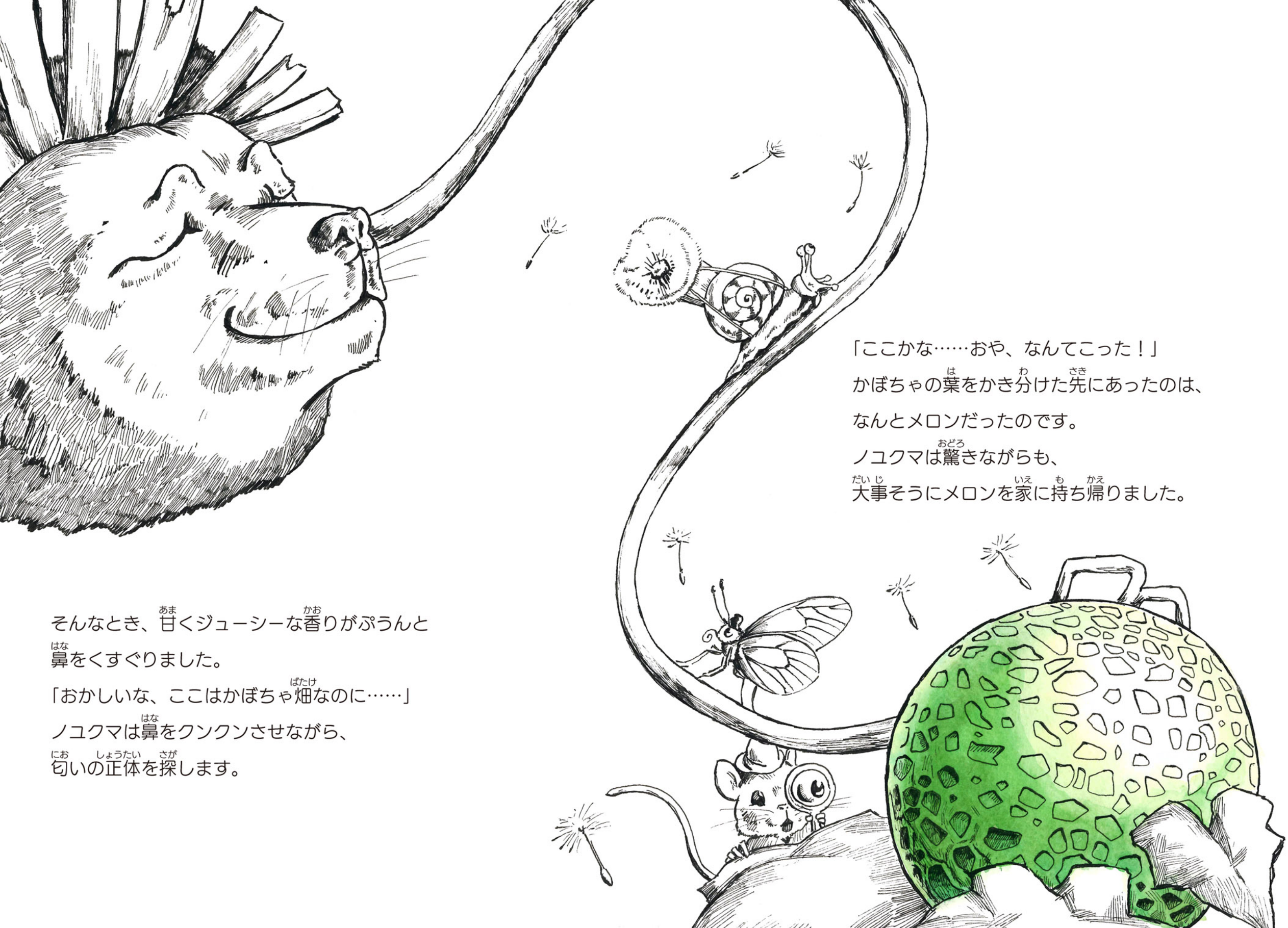
山吹色のメロン

～雪の中で育つたからもの～

とある村に、クマのノユクマが住んでいました。

ノユクマはたった一人で野菜や果物を作っています。
今までは仲間たちがたくさんいましたが、
もっと栄えている町へ移り住んでしまっていました。

「みんなが戻ってきてくれる方法はないかなあ」
ノユクマはかぼちゃ畑の中で、考え込んでいました。



そんなとき、甘くジューシーな香りがぷうんと
鼻をくすぐりました。
「おかしいな、ここはかぼちゃ畑なのに……」
ノユクマは鼻をクンクンさせながら、
匂いの正体を探します。

「ここかな……おや、なんてこった！」
かぼちゃの葉をかき分けた先にあったのは、
なんとメロンだったのです。
ノユクマは驚きながらも、
大事そうにメロンを家に持ち帰りました。

切ってみてさらにびっくり。

「かぼちゃ色だ！」

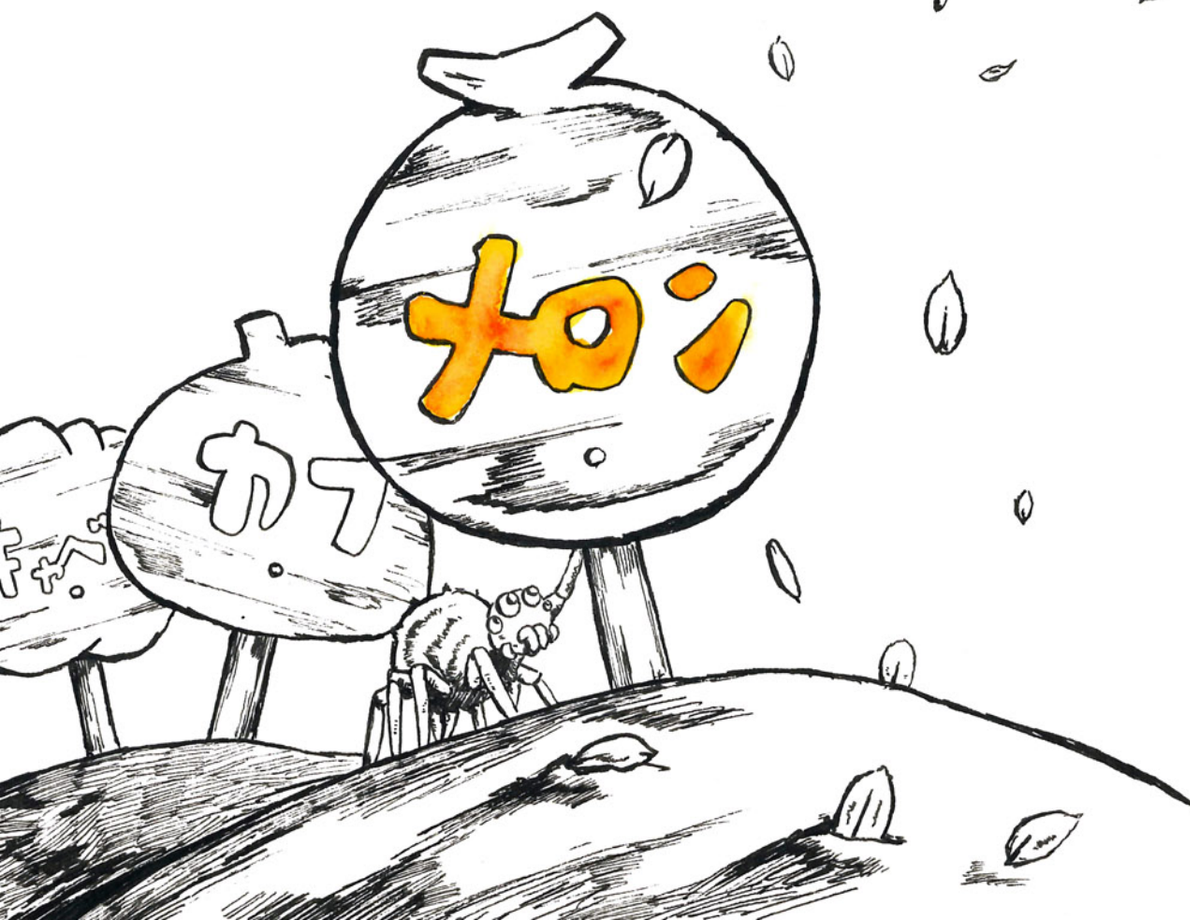
これまで緑色しか見たことがなかったノユクマ。
このメロンはかぼちゃそっくりの山吹色です。
ノユクマはキラキラ光る山吹色に釘付けになりました。

おそるおそる口に運んでみると
ノユクマの目もキラキラに。

「こんなに甘いメロンは今まで食べたことがない！」
まるまる１個をペロリと平らげたあと、
ノユクマはこのメロンを作ってみることに決めました。

年が明けたころ
キャベツなどと一緒にメロンの種をまいていきます。
すると、タヌキのポンヌフがやってきました。

「ノユクマくーん、ぼくにも種まきやらせてよ」
「ああ、ポンヌフ。毎年ありがとう」
「どういたしまして！ ……あれ、今年はメロンも作るの？」
ポンヌフはプランターにささっている〝メロン〟の文字を見て言いました。



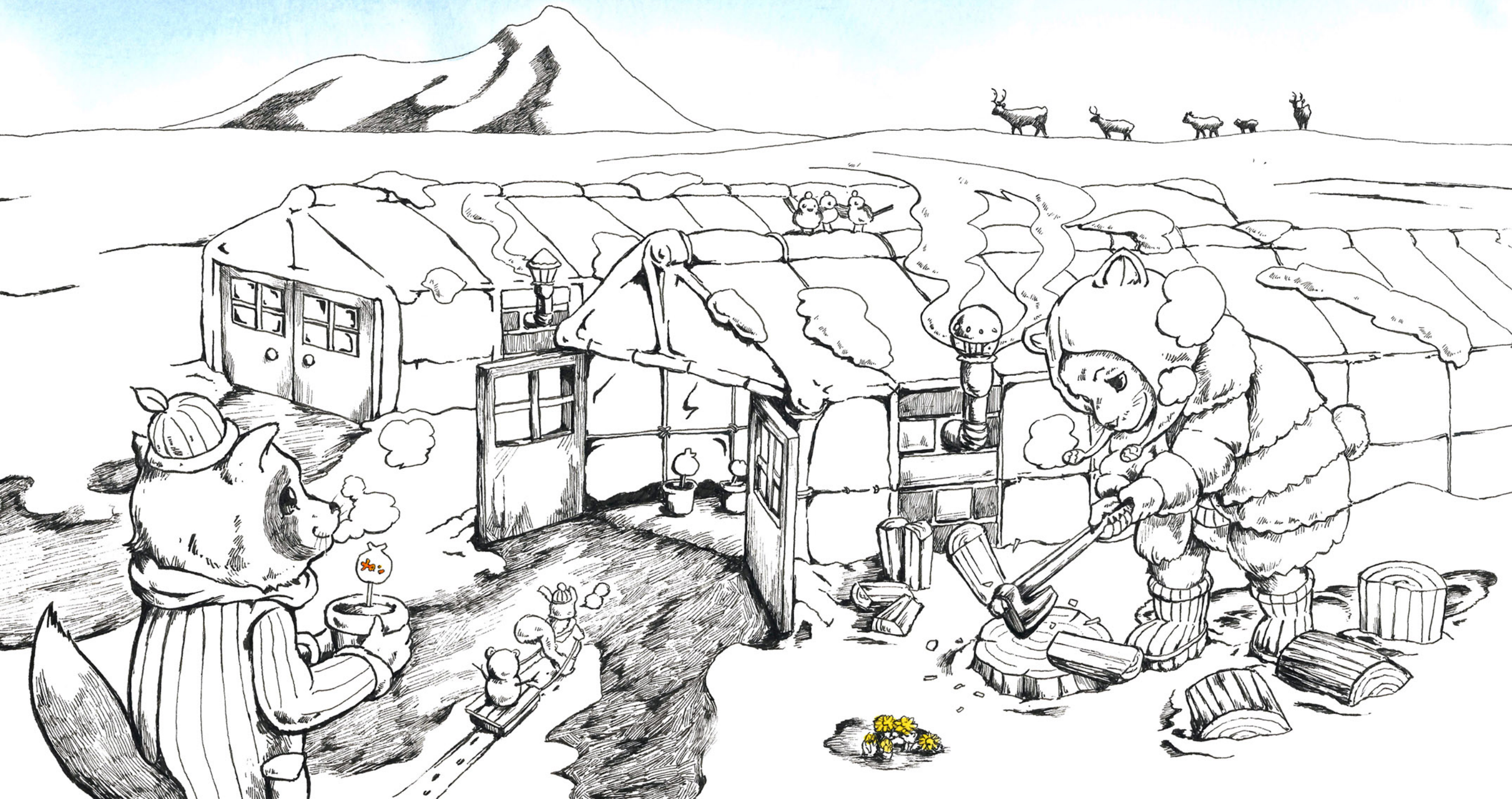
「そう、甘い甘いメロンだよ」
ノユクマはそう答えながらウインクをしました。
山吹色のことは、まだ内緒です。

しかし、他の作物から芽が出るころになっても、
メロンはうんともすんとも言いません。
「メロンは寒さに弱いのか……」

ノユクマが落ち込んでいると、
ポンヌフが小袋を持ってやってきました。

「じゃじゃん！ ぼくお手製の腹巻だよ。
これで種をあっためてみようよ！」
二人は腹巻に種を入れ、ぴょんぴょん飛び回りました。

そうしてほかほかになった種を植えていきます。
まだ雪はたっぷり降り積もっていますが、
今度こそ芽は出てくれるでしょうか……

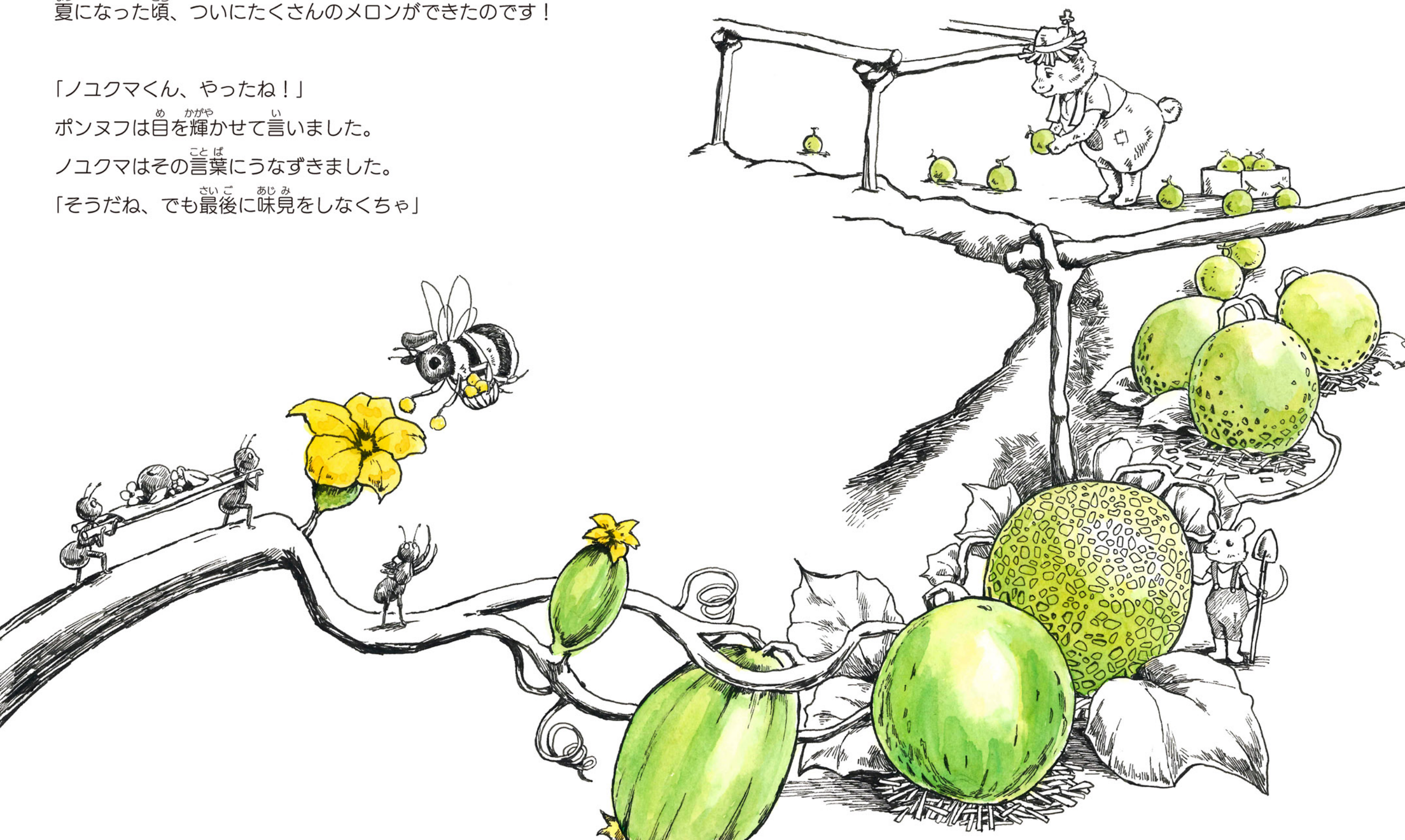


「あっ、芽が出た！」

ポンヌフはクルクル回って大喜び。
その少し後ろで、
ノユクマはそっと涙をぬぐうのでした。

その芽から葉やツルが伸び、花が咲き、実が膨らんで……
夏になった頃、ついにたくさんのメロンができたのです！

「ノユクマくん、やったね！」
ポンヌフは目を輝かせて言いました。
ノユクマはその言葉にうなずきました。
「そうだね、でも最後に味見をしなくちゃ」



パカっと半分に切ると
みずみずしい山吹色が顔を出しました。
そしてその甘いことといったら！

「こんなに甘いメロン、初めて！」
「ああ、気に入ってくれて嬉しいよ」

ポンヌフは皮のギリギリまで味わいつくしたあと、
満足そうにしている目の前の友達にこう言いました。

「ねえ、このメロン、村の新しい名物にできるんじゃない？――」

それから数年後。

ノユクマの農園は山吹色のメロンを
求める住民たちで賑わっていました。

「遠くに住む友達に送りたいんだけど」
「それならまだ熟していない
これがオススメだよ」

「メロンソフトクリームを3つちょうだいな」
「はいはい、ちょっと待っててね！」

その後、かつての仲間が戻って来て、
この村は山吹色メロンの一大産地となるのですが……

それはまだ、これからのお話。